

トップニュース



高岡教区氷見東組 大乘のつどい

能登半島地震 被害大きい地区で法話会

「みなさん『大乘』を読みましょう！」 高岡教区氷見東組は門徒推進員連絡協議会(能登谷眞喜子代表)を中心に組を挙げて本紙姉妹誌「大乘」の購読促進運動を展開している。5月20日には、能登半島地震で大きな被害を受けた富山県氷見市姿地区の長福寺(北鹿渡文照住職)で「大乘のつどい 大乘法話会」を開催した(写真)。

「み仏の光の中でともに生きていこう」

僧侶など50人が参加した。動行の後、開会の挨拶に立った寺西良夫組長は、組で行う「大乘」の団体購読運動について説明し、「一人でも多くの方に大乘を読んでもらいたい」と呼びかけた。5月20日には、能登半島地震で大きな被害を受けた富山県氷見市姿地区の長福寺(北鹿渡文照住職)で「大乘のつどい 大乘法話会」を開催した(写真)。



能登半島地震 学生が活動報告会

宗門校・龍谷大学(入澤崇学長)の学生15人がボランティア・NPO活動センターを介して4月19日から3日間、能登半島地震の被災地でボランティア活動などを行った。24日には深草キャンパス(京都市伏見区)と瀬田キャンパス(滋賀県大津市)の2会場をオンラインでつないで活動報告会を開催。学生たちが、現地で目の当たりにした様子、活動から気付かされたことなどを発表、継続した被災地支援の大切さを共有した(写真下)。



「関わる」が復興への一歩

龍谷大 支援活動の経験を共有

現地支援活動は、学生たちの声に応えようとして実施。大学ボランティア団体の宿泊受け入れを行っている国立能登青少年交流の家(石川県羽咋市)を拠点に活動した。20日は、宗派の能登半島地震支援センター(金沢市大津町)の同センターのスタッフらから被災地の現状、作業の注意事項などの説明を受けた後、民宿「えのめ荘」と民家の2カ所に分かれて、家財道具の運び出しや分別、納屋の解体などを行った(写真左)。作業の間には人と交流し、地震当日やその後の生活状況の話に耳を傾けた。



龍谷大学ボランティア・NPO活動センター 国内外の教育・行政機関、NPO・NGO、浄土真宗本願寺派など連携し、学内外におけるさまざまなボランティア活動の振興を図ることを目的に2001年4月に設立。深草・瀬田両キャンパスにコーディネーターが2人ずつ常駐し、ボランティアに関する相談対応や活動先の紹介、研修、体験学習プログラムなどの事業を、教職員と学生スタッフ協働のもとに展開している。

報告会には、学生や学外の聴講者など70人が集まった。学生が1人ずつ活動中の写真をスクリーンに映しながら報告した。西村太陽さん(1年)は「ボランティアの数が圧倒的に少ないと感じた。震災から4月近くたった今もインフラ復旧が遅れている地域では、食事は支援物資頼みという状況だった。まだまだ多くの支援活動が必要だと周りに発信していくことが、現場を知った私たちにできる支援の1つ」。西部拓海さん(1年)は「消防士を志しているのですが、被災に遭った家々を見て、家具を整理しておくことも防災につながるのではという学びもあった。日常からできる防災・減災の重要性を伝えたい」と報告した。

本願寺新報 hongwanji journal

6月1日(土曜日)

毎月1日・10日・20日発行

発行所 本願寺新報社 京都市下京区堀川通花屋町下ル 浄土真宗本願寺派(西本願寺) 千600-8501 本願寺出版社内 電話 075(371)4171(代) / FAX075(341)7753

Advertisement for satsumaya KYOTO, featuring a logo and contact information for a company in Kyoto.

新しい「領解文」(浄土真宗のみ教え)

南無阿彌陀仏 「われにまかせよ そのまま教う」の 弥陀のよび声 私に煩悩と仏のさとりは 本来一つゆえ 「そのまま教う」が 弥陀のよび声 ありがたう といたでいて この愚身をまかす このままで 救い取られる 自然の浄土 仏恩報謝の お念仏

これもひとえに 宗祖親鸞聖人と 法燈を伝承された 歴代宗主の 尊いお導きに よるものです

み教えを依りどころに生きる者 となり 少しずつ 執われの心を 離れます 生かされていることに 感謝して むさばり いかりに 流されず 穏やかな顔と 優しい言葉 喜びも 悲しみも 分かち合い 日々に 精一杯 つとめます

カエルの大合唱が聞こえる時期がきた。近所を歩くと、田植えも終わり、雨も降って絶好の居場所がしつらえられた、と喜びの声をあげているようだ。しかし、少し歩くと様子は一変してくる。田は宅地に変貌し、住宅が建築中だ。こうして田がなくなっているのは、私の近所だけの話ではない。▼カエルの立場からすると、すみかが狭められ、生きづらくなっている。ひょっとして、カエルの鳴き声は喜びの声ではなく悲鳴かもしれない。カエルたちを追い込んでいるのは、ほかならぬ我々人間である。人間に善むおごり、たかぶりと無関係ではないように思えてくる。共に生きていこうという優しいところは微塵も残っていないのではないだろうか。▼ある寺院の掲示板に「頭は低く、目は高く、心は広く」ということばが掲げられていた。私の姿は全くの逆で、「頭は高く、目は低く、心は狭く」ということだと深く思いしらされる。謙虚さということを忘れるべきではないだろう。思いあがることは、できるだけ抑えていかねばと思う。頭を低くすることこそが、共生していくということではないか。そして互いに謙虚あうところを大切に、自他の距離を小さくし、対話していくことが平和実現への道のりではなからうか。▼仏教は、その出発点から平和主義、平等主義を標榜してきた教えである。また、親鸞聖人も「世のなか安穩なれ、仏法ひろまれ」とおっしゃる。争いのない世界が実現することを願うばかりである。

Advertisement for 'Old Disease Support' (老病死を支える) featuring a book by Dr. Hiroyuki Hiraiwa, published by Jishosha.

Advertisement for 'Daikoku Hachiroku' (御本山御用達 鍵長法衣佛具店) located in Kyoto, selling Buddhist supplies.

Advertisement for 'Daikoku Hachiroku' (香老舗 董玉堂) featuring incense products and a long history of 400 years.

Advertisement for 'DAIJO' magazine, published by Hongwanji Shuppan, featuring Buddhist talks and essays.